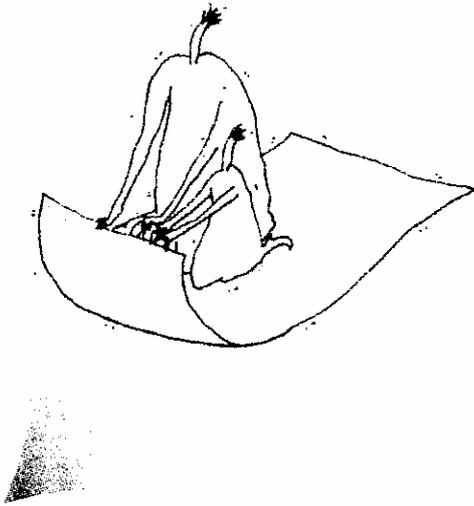


利用券

第3編 10章

まことのキリスト者はこの世の良き物を神からの贈り物として受け取り、それを天国への旅路を辿るための助けてとして用いる。



物

危険な肉欲を制御する第一の秘訣が、神を仰ぎ見るということ。私たちはそのすべてのものを受けるときに、そのすべてのものを私たちに与えてくださる方を認め、その方の慈しみにいつも感謝を献げることが必要です。楽しむことも許されていますし、食べることも飲むことも善いことです。しかし飲食を楽しむことだけに私たちの心を傾けて、敬虔の努力を忘れ、神様が私たちに与えてくださった使命を果たせなくなるとしたら、それはどんなに悲しむべきことでしょうか。

ドラゴン列車、バイキング、回転木馬、空飛ぶ絨毯…、こんな名前を聞いてあなたは何を思い浮かべるでしょうか。これらは遊園地にある様々な乗り物の名前です。最近の遊園地ではたいへんに良くできた乗り物が多く作られていますから、子供たちだけではなく、大人たちをも大いに楽しませています。しかし、それらの乗り物に乗るには、その度ごとに乗車券を購入しなければなりません。一つ、一つの乗り物の乗車券はわずかな金額であっても、一日中、遊園地の乗り物で遊んだとしたら大変な出費になるかもしれません。ですから、遊園地の側ではそんな利用客のために一日中、自由に遊園地の乗り物を利用することができる一日利用券を作っているのです。一度その利用券を買い求めれば遊園地にあるすべての乗り物を一日中、心ゆくまで楽しんで利用することができます。しかし、遊園地で楽しく一日を過ごすためにはその場所の秩序を守り、そこで掲示されている警告に耳を傾けなければなりません。

この世はキリスト者に神様が与えてくださった贈り物と言えます。私たちはそれを軽んじることなく、喜んで受け取ることが大切なのです。しかし、それらのものはキリスト者の心と生活を来たるべき世、天国に向けさせるための助けであることを私たちはいつも忘れてはいけません。

第1節 二つの誤った態度：過剰な禁欲主義と、行きすぎた放縦は二つの極端な誤りである。

私たちは神様からこの世でたくさんの良き物を与えられて生きています。神様はいろいろなところでその良き物を与えられ、私たちはそれを受け取っています。生命、時間、才能、太陽、風、海、山、花、家族、友人、教会、家、職場、財産、音楽、美術品など…。私たちはその良き物をどのような態度で所有し、管理し、また、受け取るように努力すべきなのでしょう。世にあるものはどんなに良い物でも実際にはすべて私たちを愚かにさせ、罪を犯させるものでしかないので、それに心を向けず、それらから身を引いて生きなければならないと言う態度を取るべきでしょうか。それとも、せっかく神様が贈り物として与えてくださったものなのですから、できるかぎりたくさんものを手に入れて、それを使い放題に使って生きることがいいのでしょうか。

ある人々はこの世の良き物を受けることについて自分に非常に厳格な制限を加えています。テレーズのクラテス (Crates) は財産こそが自己を喪失させるものだと語り、自分の財産のすべてを海に投げ捨てたと言われています。しかしながら、またある人たちは正反対の立場を主張します。彼らにはそれをどれくらい使うのか、何を使うのか、どのように使うのかに限界がありません。何でも自分のものにし、それを自分のために限りなく使おうとするのです。しかし、この二つはどちらも極端な誤りと言えるのです。

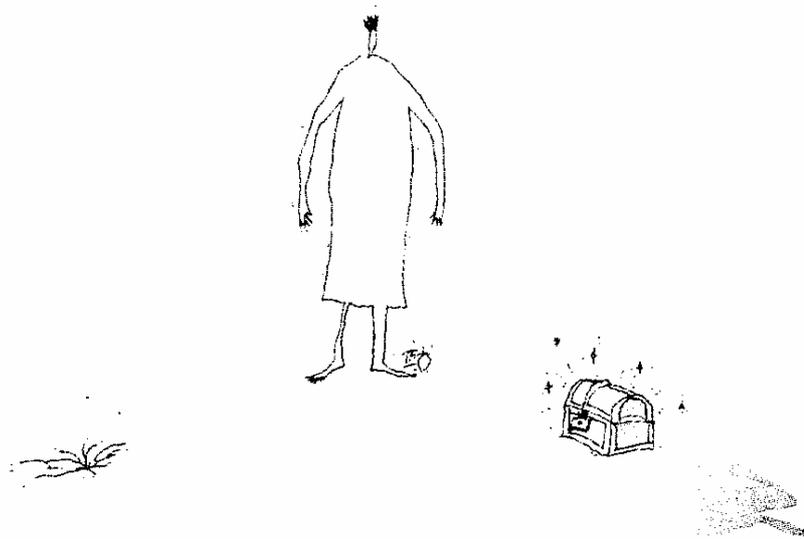
私たちがこの問題についての答えを得ようとするならば、まず神様がこの世の良き物をなぜ私たちに与えてくださったのか、その目的を知る必要があります。神はどうしてそれらのものを与えてくださったのでしょうか。第一に私たちにはそれが必ず必要であるからです。食べる物、着る物、住むところ、すべて私たちの必要を満たそうとして神様が与えてくださったものなのです。しかし、神様は必ずしも私たちの必要を満たすだけのためにそのすべてのものを与えてくださっているわけではありません。

第二に、私たちの喜びと楽しみのために与えてくださるのです。私たちに食べ物を与えられるのは、必ずしも私たちの空腹を満たすだけのためではありません。食べ物は私たちにそれ以上のものを与えてくれるのです。それらのものは私たちに喜びと楽しみを与えてくれます。着物もそうですね。私たちは身体を覆うためだけに着物を着るではありません。草、木、果物も同じです。それらは人間にとってそれなりの利用価値がありますが、それらの目的とは関係なく、それぞれ美しい姿と香りを持っています (創世記 2:9 参照)。

一言で言えば、主は私たちに必ず必要な物だけを造られたのではなく、そのような必要に加えて、あるいはその必要とは関係なく、単純に私たちが見て楽しむことができるものをたくさん造られているのです。誰が音楽を必ず必要なものでないと軽視できるのでしょうか。音楽にはすばらしい価値があります。万物は単なる有用性の価値だけではなく、それを超越した美の価値も秘めています。ですから私たちは必要のためでも、楽しむためでも、どのような目的でも、この世の贈り物を清い良心をもって利用することができるようになるに一定の原則を守らなければならないのです。

第2節 第一原則：与えてくださった方をいつも仰ぎ見ることができるようにする。

被造物を利用するとき、それを人間に必ず必要な場合だけに制限するような行き過ぎた禁欲主義的な考えがあります。しかしそれは神様の豊かな慈しみを軽視し、拒絶することを薦めるような認めることのできない悪意に染まった哲学だと言えます。しかし、同時に私たちは狂った獣の



ようにいつもでも暴れ回る準備をしている私たちの肉欲を制御することにも厳格なる努力を傾けなければなりません。肉の欲望は制御されなければ、どのような枠も超え出ようとするからです。ある人々は自由が許されていると言うことを口実に自分の欲望を野放しにして放縦の

道に陥ってしまいます。

このような危険な肉欲を制御する第一の秘訣が、神を仰ぎ見ると言うことです。私たちはすべてのものを受けるたびに、そのすべてのものを私たちに与えてくださる方を認め、その方の慈しみにいつも感謝を献げることが必要です。楽しむことも許されていますし、食べることも飲むことも善いことです。しかし飲食を楽しむことだけに私たちの心を傾けて、敬虔の努力を忘れ、神様が私たちに与えてくださった使命を果たせなくなるとしたら、それはどんなに悲しむべきことでしょうか。私たちの肉欲は私たちが譲歩し始めるなら、際限なく私たちの内側からわき上がってくるのです（ローマ 13:14）。

第3節 第二原則：旅人としていつも永遠の命が待つ天国を思いめぐらすようにする。

私たちがどうにかして肉の欲望に捕らえられることがないようにする最上の道は永遠の命と天国を待ち望み、それに対してこの世の命を取るに足りないものと認めることです。「愛する人たち、あなたがたに勧めます。いわば旅人であり、仮住まいの身なのですから、魂に戦いを挑む肉の欲を避けなさい」（ペトロ第一 2:11）。ですから天国への旅人たちはこの世の良き物を用いるときに次のような使徒パウロの教えに従うべきなのです。

「兄弟たち、わたしはこう言いたい。定められた時は迫っています。今からは、妻のある人はない人のように、泣く人は泣かない人のように、喜ぶ人は喜ばない人のように、物を買う人は持たない人のように、世の事にかかわっている人は、かかわりのない人のようにすべきです。この世の有様は過ぎ去るからです」（コリント第一 7:29～31）。私たちのこの世の人生が旅人としての人生であるならば、どんなに良い物であったとしてもそれに心を傾け過ぎるなら、それは旅の邪魔をする重荷となるだけです。ですから天国への旅人は肉体より魂を豊かにすることにさらに精神を傾けるべきです。昔、カト（Cato）という人は「肉体の外見については多くの関心があるのに、徳と言われるものにはたいへん無関心である」とこの世の人々に対して当を得た言葉を語りました。

第4節 第三原則：豊かなときは節制し、欠乏のときは忍耐するようにする。

私たちがこの世で生きて行く有様は様々です。ある人は富んでいますし、またある人は貧しい者として生きています。ある人は権力を持っていますし、ある人は低い地位に甘んじなければなりません。また、ある人は健康ですが、ある人は病気を抱えながら生きています。ある人は名誉を欲しいままに手に入れて生きていますし、ある人は人々に名前さえ忘れられた人生を送っています。しかしどのような姿で生きるにしても私たちはいつも平安な心で神様に感謝を献げ、最善を尽くして生きなければなりません（フィリ



ピ 4:12)。ですから豊かであるならば節制して、使いすぎないようにし、貧しければそれに忍耐し、足ることを知らなければなりません。貧困や窮乏によく耐えることができないで、不平と不満で心一杯にしている人々は、ひとたび名誉を受けるようになれば間違いなく傲慢な姿を現わすことになるからです。

第5節 第四原則：管理人である私たちは最後にはすべてのことで神の決算を受けることになることを覚えて生きるようにする。

私たちが地上の物質を使うとき、いつも忘れてはならないことがあります。それは私たちがそのすべての物の主人ではなく、管理人であるということです。慈しみに満ちた神様が私たちの必要と私たちの喜びのために与えてくださるものすべては私たちが勝手に楽しむためだけにあるのではなく、私たちは神様からその管理を委ねられているのです。そうであるなら私たちは最後には必ず決算報告をしなければならぬはずで、すなわち私たちは『お会計の報告を出しなさい』（ルカ 16:2）という主のみ言葉をいつも覚えながら、すべてのものを管理する必要があります。

世の良き物を自分のためだけに得ようとするのではなく、隣人の必要を満すためにも用いるべきですし、それを返って私たちは喜びとすべきなのです。その上で私たちが物質をもって隣人に仕えようとするとき、そこに愛が伴わなければそれは何の役にも立たないことを知るべきです。私たちは物質を隣人に分け与えるときにいつも愛という器にそれをもって差し出さなければならぬのです。そのようなときにこの世の物質は私たちの精神を健全にし、清くさせ、私たちの敬虔のための益となるはずで、すなわち。

第6節 第五原則：いつでもどこでも召命感を持って生きるようにする。

神様は私たちにいつどこで、何をするにしても自分に与えられた召命感に関心を置くことを求められています。この召命感こそ私たちがどのような状況の中でも信仰を失うことなく、幸せに

生きることができるための力となるからです。神は私たちの心が、落ち着きがなく、あちらこちらへと迷い出てしまうことを、また、たくさんのを自分のものにしようとして、飽くことのない野望を抱いて生きてしまうことを知っておられるのです。ですから神は愚かで手のつけられない私たちをその混乱から守るために、私たちにそれぞれに異なった領域で特別な義務を遂行するようにされるのです。

そして誰も自分のその限界を無謀に超えてしまうことがないようにと神様が私たちに与えられたその多様な生活の領域を特別に召命と呼んでいるのです。神が私たちをその領域、その姿で召しておられるのですから、私たちはその召しに満足し、感謝し、そこで最善を尽くして神様の栄光を表わすようにするのです。富んでいる者として召されたならば、富んでいる者として持たなければならない重荷と義務があり、貧しい者として召されたならば、貧しい者として負わなければならない義務と重荷があるのです。すべての召命には義務があり、忍耐して負わなければならない苦難があるのです。

現在の自分の人生が恵み深い神様のそのような召しに従って存在していると言う事実を知るなら、たとえ今、私たちが心配や労苦、災難やその他の重荷の中にあつたとしても大きな慰めを受けることができます。政治家は政治家として、主婦は主婦として、事業家は事業家として皆自分の生活の領域で必ずと言っていいほど困難や気苦労、悲惨や心配事があるはずですが、そのすべての重荷はすべてその場に召して下さった神様が私たちに負うようにされたものだと思えるとき私たちは豊かな力を受け、それらの苦難に打ち勝つことができるのです。

いえ、実際に私たちをそのように召して下さった神様はそれを成し遂げる力をも私たちに与えてくださるのです。ですからたとえ自分が最前列にいないとしても、そこで自分の任務を果たすことに満足し、神様が配置して下さった場所から逃げ出すことがないようにしましょう。自分がどんな場所にあつたとしても、いつも正しく生き、最善を尽くして献身し、終わりまで十字架の道を進むべきなのです。それがたとえどんなに小さな働きだとしても私たちが神様の御心通りに行くとき、神様は私たちの働きを通して神の栄光を表して下さるからです。

結びの言葉

天国はどんなにすばらしいところでしょうか。しかし天国とは比べることができませんが、この世界も隅々に至るまですばらしいもので満たされています。そこには私たちが神様から受け取った良き物がどんなに溢れているのでしょうか。自由に遊園地の乗り物に乗ることができる利用券を持っている人と同じように、私たちはこの良き物を自由に利用することができることに興奮を覚えます。しかし、その利用券を使うために私たちは決められた規則、原則を守る必要があります。あなたはその原則を知っていますか。